

「その色、綺麗だね」

美術室で絵を描いていると、声が降ってきた。見上げると予想通り、兩宮先生だった。

濡羽色の黒髪や、透けそうなほど白い肌はまるで透明水彩で彩られたみたいだ。

「先生、音も立てずに来るのは驚くからやめてって、いつも言ってるじゃないですか」

そう言うと先生は、銀縁眼鏡の奥で鳶色の瞳に笑みを浮かべた。

「元宮さんだって、僕のことを先生っていうのはやめてって言ってるのにやめてくれないでしょう」

「じゃあなんて呼べばいいんですか、兩宮君？」

「それも小っ恥ずかしいな、やっぱり先生でいいよ」

この学校の美術教師であるはずなのに、先生と呼ばれるのを何故か嫌がる彼との出会いは、まだ木々が薄桃色の花卉を纏っていた頃のこと。

小さい頃から絵を描くのが好きで、高校でも美術部に入部したのだが、美術室には自分以外に部員がいなくて、一人で黙々と絵を描いていた。先生はそこに突然現れたのだ。

「黒は使わない方がいいよ」

顧問の安西先生の声ではなかったので驚いて勢いよく顔を上げると、机の向かいに、黒いシャツにジーンズというラフな格好をした若い男の人が立っていた。腕や手に絵の具がついていて、私はその時初めてこの学校に美術教師が二人いることを知った。

「黒を使うと単調になってしまうから」

「そうなんですネ。水彩画って難しいですね」「よかつたら僕が教えようか」

「いいんですか」

担任を持つ安西先生は忙しく、滅多に部活に顔を出さないので、なかなか教えてもらう機会がなかった。頷く先生に、胸に暖かい柑子色の喜びが漂ったのを今でも覚えてる。

あれから約四か月。蝉の声が耳を劈く今は夏休み中で、午前中に学校に来てコンクールに出すための絵を描いている。

「透明水彩って難しいけれど、滲みや暈しが表現できるのが良いですね」

最近先生に勧められて、透明水彩を使い始めた。水に濡れた絵の具が煌めくのがとても綺麗だ。

「でしょう？僕は透明水彩で色を塗るのが一番好きだな」

嬉しそうに言う先生に頷きながら、山吹色の上に淡い躑躅色をのせると、下の色に影響を受けて重なった部分が朱色になる。この瞬間がたまらなく好きだ。思わず笑みが溢れた。

「元宮さんは本当に楽しそうに絵を描くね」  
突拍子もなくそんなことを言われ、思いがけず満面に朱を注いだ。照れてしまったのを誤魔化したくて

「先生も私に絵の話をする時、とっても楽しそうですよ。小さい子どもみたいで」  
早口にそう言うと、先生は短く驚いて、恥ず

かしそうに目を伏せ、足を組み替えた。何だか面白くて吹き出してしまうと、先生も白い歯を見せて笑った。頬にできた笑窪が愛らしかった。

次の日も朝から美術室に足を運んだ。三者面談があるから、あまり長くいられないのが残念だ。

「三者面談って進路の話するんだよね」

「志望校とかについて話すんだと思います」

「元宮さんはやっぱり美大に行くの？この辺りだと、美術大学とか……」

先生がさも当たり前かのような調子で言うので、慌てて大きく手を横に振った。

「確かに絵を描くのは好きだけど、趣味にとどめるぐらいでいいかなって思ってます」

「あ、そうなんだ……」

先生は私の言葉に意表を突かれたように目を丸くしてから、今までに見たことがないくらい悲しそうな表情をした。何故先生がそんな顔をするのか分からず、返す言葉が見つからないまま静寂が広がった。決まりが悪くなって席を立った。

「もうすぐ親が来ると思うから行きますね」

「うん、いつてらっしゃい」

行くあてもなく校内を歩き回っていると、手が色取り取りに彩られていることに気がついた。面談までに落としておこうと思い、手洗いの場に向かった。冷たい水に手を晒しながら先程の会話を思い出す。先生にはああ言ったけど、美大に行きたい思いが少しもないわけではない。けれど親にそんな話をした事もないし、する勇氣もない。そこまでの覚悟が自分にはない

のだと思う。かといって、親の勧めで第一志望にした国立の教育学部に本当に行きたいわけでもない。親に従ってばかりで、反抗の仕方もあるからない自分に、そして、いつも意思がなくてはっきりしない自分に、どうしようもなく苛立った。――私は、こんな私のままで残りの高校生生活を浪費していくのだろう。頭を過った考えにまた苛立って、勢い任せにハンカチで手を拭いた。

時間を確認すると面談時間が迫っていて、慌てて教室に向かって走った。青春を題材にした物語ではやたらと主人公が全力疾走しているが、私はいくら走っても主人公になれない気がした。校庭にそびえる木々を覆う、クロムグリーンの絵の具で塗られたような葉っぱ達が、私を揶揄うように音を立てて揺れていた。

「第一志望のA大学、この成績をキープ出来たらいけると思いますよ。国立だご両親も助かるでしょう？」

「そうですね、家から通えるし、やっぱりここが良いわね」

成績表に書かれた学年三位の文字に、母は調子がいい。

「そうよね、玲子」

じわりと押し付けられた圧に負けて渋々頷く。『最小限のお金で安定した職に』そんな母の思いが透けて見えるようで遣る方ない感じがした。――安定した職につく事がそんなに偉いのか。言い返せない自分にも嫌気がさした。ここで何か言わないと私はずっとこのままだという焦燥に駆り立てられて、小さく貧乏ゆすりをしてしまう。

「併願で私立の大学を受ける予定はある？」

先生の言葉に私は咄嗟に口を開いた。

「美術大学を受けたいです」

「美大？ああ、元宮さんは美術部だったわね」

先生は少し納得したような顔をしたけれど、母は違った。

「美大はお金がかかるでしょう、画塾にも行ってないし」

明らかに色を損じた母に、そのまま黙り込んでしまった。

「じゃあ〓教育大学とかどうですか？」

重くなった空気を察して先生が提案する。完全に沈んだ気分で、何かを言う気も失せてしまった。あの後どんな話をしたか、あまり覚えていない。

「もうすぐ完成だね」

描きかけの絵を見てみると、いつものように突然声をかけられた。

「わっ！ほんとに先生って幽霊みたい」

いたずらっ子の様な笑顔だった。

「元宮さんの反応が面白くてつい、でも幽霊って……」

「あれ、先生怪我してますよ」

先生の頬にできた小さい切り傷から、猩々しょうじょうひ緋色の血が滲んでいた。

「本当だ、気付かなかったな」

「私、絆創膏持ってますよ、どうぞ」

「ありがとう、助かったよ」

先生は絆創膏を貼りながら急に真面目な顔をした。

「元宮さん」

名前を呼ばれ、緊張した。

「わかったわ。あのね玲子、部活もいいけど、大学合格できるよう勉強も頑張ってるね」

母の期待の眼差しが突き刺さって、胸が痛かった。

美術部に戻ったときには、もう先生はいなかった。

散らかしたままだった画材を片付ける。

近所の画材屋で適当に買ったスケッチブックはそろそろページがなくなりそう。ペラペラとページを捲った。

ほとんど毎日、先生と一緒に絵を描いてきた。花、建物、動物、人物。絵を見た瞬間にその時先生に何を教えてもらったか、どんな話をしたか、鮮やかに思い出せる。明日もまた、いつもみたいに先生と絵を描けますように。切実に願いながら美術室を出た。

「……先生はなんでもお見通しなんですネ、最近美大に行きたいって思い始めました。でもやっぱり、上手じゃないからなあ」

昨日の面談での母の反応を思い出していた。

「いいんじゃないかな、今上手なくても」

先生は真剣な面持ちで続ける。

「確かに美大にはそれなりに絵が上手くないと入れないけど、君にはまだ時間がたくさんある。今からでも遅くないと思うよ。それに、上手くなるために大学で学ぶんでしょ？」

色を正して見つめられると、だんだんと目を合わせられなくなって俯いてしまう。

「元宮さんが躊躇う理由が、本当に理由にな

っているのか考えてみて」

先生の言葉にハッとさせられた。私はいつもそうだ。好きなことは好きなままでいたいから、趣味としてほどほどに楽しくできればそれでいいと思っていた。親に反対されているからなんて理由をつけていたけど、絵と本気で向き合うことを邪魔立てしていたのは、他でもない、言い訳を重ね続ける自分だったのだ。顔を上げると、先生はいつもの笑顔を見せた。

「残ったものが本当の思いだよ」

—私の本当の思い。

「私、親と話してきます！」

足が勝手に動いていた。色を変え品を変えて、必ず母を説得しよう。家までの道のりを全力疾走しながら、私は初めて自分が主人公になっている気がした。

「お母さん、私美大に行きたい！」

息も絶え絶えにキッチンにいる母に叫んだ。

母は私の大声に驚きつつも冷静に言った。

「美大はお金がかかるの、玲子も知っているでしょ」

「奨学金を借りる、絶対に自分で返すから。行かなかったら後悔すると思うの、お願いしなす」

十七年生きてきて、初めて親に反抗したと思う。怒られている訳でもないのに泣きそうになって声が震えた。母は何も言わず、フライパンに油を引き、卵を流し入れる。その工程一つ一つに何時間もかかっているかのように、流れる時間が長く感じられた。ダイニングテーブルに二つの皿を運んだ母が、エプロンを外しながらこちらを向いた。

「……やるからには本気でね」

膝から崩れ落ちて、我慢していた涙が零れ落ちた。母に座るよう促され、ふわふわのオムライスを食べている時も涙が止まらなくて、いつまで泣いているのと呆れられた。母は美大受験を許可することと引替えに、条件を出した。

『必ず美術の教員免許や学芸員の資格取得をすること』赤い目を擦りながら何度も何度も頷いた。

次の日、いつまで経っても美術室に先生は現れなかった。先生に昨日のことを話したくて仕方ないのに残念だ。そんなことを考えながら作業を進めていると、とうとうコンクールに出す絵が完成した。顧問の安西先生を呼ぶ。黒よりも白が勝った癖の強い髪を揺らす先生に尋ねた。

「今日は雨宮先生はいないんですか」

「雨宮先生？はて、そんな先生この学校にいたかなあ」

「えっ、もう一人の美術の先生だと思っんですけど……」

「十年ほどこの学校にいるけど、僕以外美術の先生はいないよ」

みぞおち 鳩尾を殴られたかのような衝撃に、目の前がグラグラと揺れ、見ているすべてにだんだんと色がなくなっていく。なら私が毎日のように会っていた彼は誰だというのか。これは夢なのだろうかと思いつつも、慌ててスケッチブックを開いた。いつの日か描いた雨宮先生の絵。—先生、動かないでください。—この体勢、結構疲れるんだよ。そんな会話をした。確かにしたのだ。

「この人です。私この人にずっと絵を教えて貰ってたんです」

「これは伊織君じゃないか」

「先生、知ってるんですか」

「三年前にこの学校を卒業した雨宮伊織君。美術部だったんだ。とても絵が上手くてね、~~不~~美術大学に進学したよ」

私が志望している学校ではないか。そこに行けばもしかしたら先生に会える、そう思ったのにその希望は打ち砕かれた。

「でも去年亡くなってしまっただね」

嘆嗟の声も出なかった。

「丁度こんな暑い時期だったよ。外で熱心に絵を描いていたらしくて、熱中症でね」

何処からか、泣き声が聞こえた。暫くして泣いているのは自分だということに、やっと気づいた。

「不思議な話だね。亡くなったはずの伊織君に絵を教えてもらったなんて」

安西先生は思い出したように、あっと声を漏らした。

「美術室に伊織君の自画像があるんだよ、あまりに上手いから飾ってたんだけど」

先生は私を美術室の棚に案内した。確かにそこには水彩画があった。濡羽色の黒髪、透けそうなほど白い肌、鳶色の瞳。紛れもない雨宮先生だった。毎日のように美術室に来ていたのに今の今まで気づかなかったのか。

「一昨日に棚を整理してた時に爪で引っ掻いてしまったね、頬の部分の絵の具が少し禿げってしまったんだけど……あれ、この絵、絆創膏なんて貼ってたかな」

痛いぐらいに心臓が跳ねた。絵の中の先生の

目元には確かに絆創膏が貼られている。

「昨日先生が頬に怪我してたから、絆創膏を渡しました」

「そうか……伊織君は、君が絵を描く姿を見て教えたくなって、この絵からでてきたのかもしれないなあ」

安西先生は微笑を浮かべ、しみじみと言う。私の可笑しな話を信じてくれているようだった。

—安西先生、至急職員室までお願いします。

しみみりした空気に無機質な音が響いた。小走り美術室を出る安西先生の背中を見つめていると後ろから聞きなれた心地の良い声がした。

「親御さんとお話はできました？」

何故かいつもみたいに驚かなかった。振り返った私の目に映った雨宮先生は、陽の光を受けた肌が赤みを帯びて綺麗だった。

「~~不~~美術大学を目指すことにしました。今度画塾の体験に行ってきます」

「それはよかった。月並みなことしか言えないけど、君の絵には魅力があるよ、これから頑張るってね」

「ありがとうございます」

ふと雨宮先生の自画像を見ると、勿忘草色に塗られた背景だけが残っていた。

「本当に先生じゃなかったんですね」

「だから先生って呼ぶのはやめるよう言ったでしょう」

「でも私にとって貴方は先生だわ」

例え先生が空気よりも透明な存在だったとしても、絵を描くことの魅力を教えてくれて、私が自分の色を見つけれられるよう導いてくれたこ

とに変わりはないのだ。

「君が志望してる大学にきつと僕の描きかけの絵がある。僕はその絵を、君に完成させて欲しいと思ってるんだ」

「私、もし先生に出会えてなかったら、本当の自分の想いに気づかないままだったと思います。先生に出会えて本当に良かった」

また泣きそうになりながらも必死に声を紡ぐ。

「恩返しになるか分からないけど先生の絵、必ず完成させます。最初で最後の合作ですね」

精一杯笑って見せると、先生も笑みを口元に湛え、小さく頷いた。

「私、もう行かないと」

「そっか……じゃあね元宮さん。こんな不思議な形だけど、僕も君と出会えてよかった」

私も先生も口にはしないけどきつと、もう会えなくなることを心のどこかで感じていたのだと思う。

最後に振り返った時、先生の目が水に濡らした透明水彩みたいに煌めいていた。

### 【アクアレス：Aquarelle】

フランス語で透明水彩、または透明水彩画法を意味する。